

# 徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

昭和女子大学 特任教授

平井 聖氏

HIRAI-Kiyosi



経歴

1929年、東京生まれ。1952年、東京工業大学卒業。現在、昭和女子大学特任教授。東京工業大学名誉教授。金沢美術工芸大学特任教授。上海交通大學顧問教授。専門分野は日本近世建築史、住生活史。駿府城二の丸巽櫓・東大手門復元工事をはじめ、熊本城本丸御殿、五稜郭箱館奉行所、金沢城菱櫓・五十間長屋・橋詰門続櫓、同河北門などの復元を監修。

## 豊臣色の一掃にむけて策を謀った大御所家康

慶長十六年(1611)四月十二日、黒の覆面(寡頭)をして、後水尾天皇の即位を、後ろで見守っていたのは、ほかならぬ大御所徳川家康でした。

此の即位式は、家康にとって、豊臣色を一掃する大きな目的の、最初で最大の関門だったのです。後陽成天皇の第一皇子良仁親王は、秀吉の意向で皇太子の扱いを受け即位の予定でした。しかし、家康は將軍宣下を受け、すでに二代將軍秀忠まで誕生していた中で、豊臣の意向に依る天皇の誕生は、あり得ないことだったのです。

家康は、豊臣にかかわった人々を、重要なポストから、排除しています。自分の跡継ぎも、例外とはしませんでした。二男秀康を、二時秀吉の猷子となっていたことから

越前福井に封じ、三男秀忠を二代將軍としてします。後陽成天皇が後継にと望んだ智仁親王も、同じ理由で同意せず、八条宮家を創設しています。その結果が、第三皇子政仁親王の即位だったのです。そのため、無事式が終わるよう、指図したかったに違いありません。

その後、家康の孫娘和子が、後水尾天皇の女御として入内するのです。

豊臣氏との関係は、大坂夏の陣で決着がつきます。この発端となったのが、方広寺の鐘の銘文ということですが、実はほかに、も因縁をつけた人がいたのです。それは、家康側近で、京大工頭要職にいた、中井藤右衛門正清でした。正清は、この時いち早く駿府に下向して、上棟式で掲げられ

る棟札に、棟梁である自分の名前がないと家康に訴えているのです。

方広寺ほどの大工事では、上棟式は建物が完成して行われます。その時、棟木に付けられる棟札には、関わった主要な工人たちの名が記されます。棟梁の名前が無いなどということは、意図的でなければ、考えられません。

鐘の銘文にしても、南禅寺の文英清韓に選定させたのですから、家康の側近であった南禅寺金地院の崇伝が知らなかったはずはありません。畏にかかった方が、うかつだったのです。

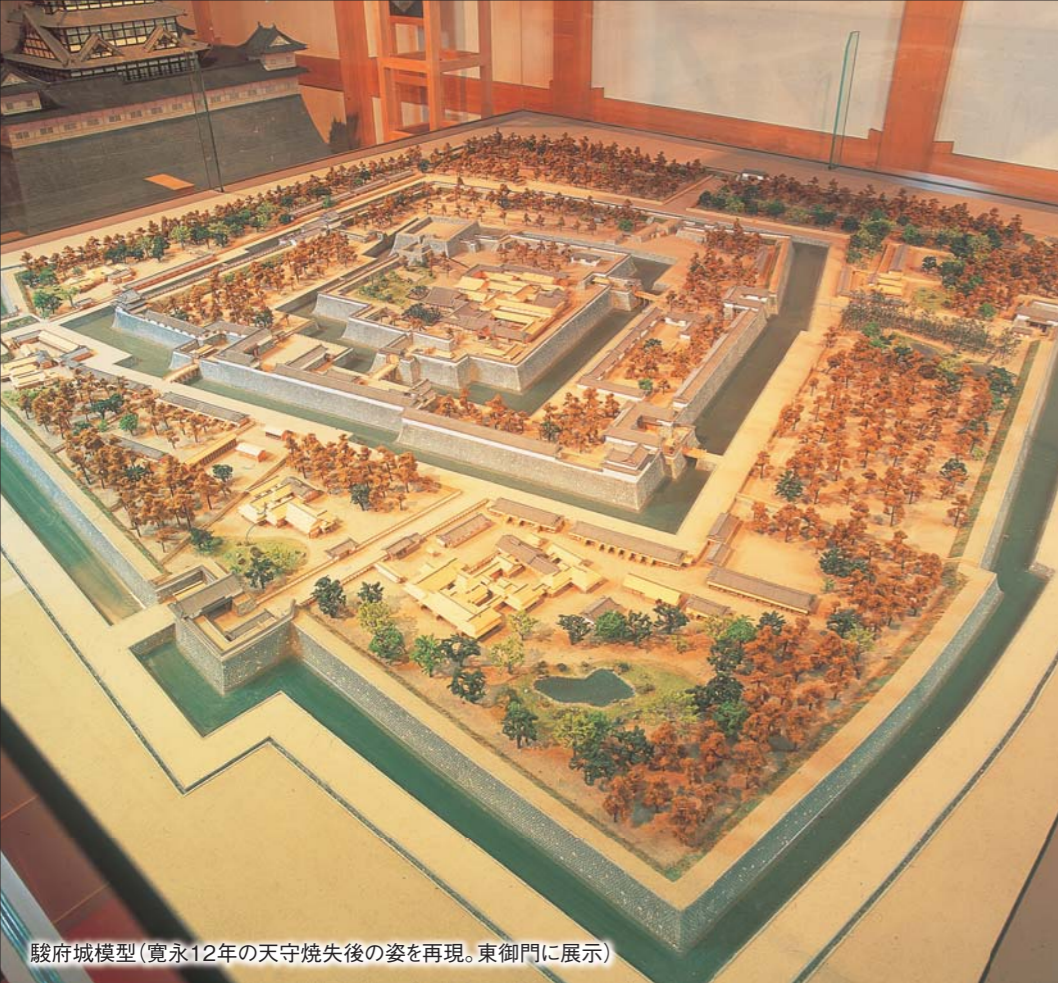
中井藤右衛門の名は、慶長八年(1603)家康が將軍宣下を受けた後、参内する時の宿館として造った二条城の工事帳簿に残っています。その後、京都・江戸ばかりでなく、家康の隠居城である駿府城の

工事にもあたります。

駿府城については、慶長十二年(1607)の火災の後のことしかわかりません。資料も後の物しかなく、天守に関しては、天守台の上の建物をシルエット風に描いた平面図、日光東照宮の縁起絵巻の絵、明治になって写された天守台の写真があるだけです。

これらからわかることは、石垣で囲まれた天守台の中に、天守を建てていたことです。天守の二階と三階に御殿風の縁を巡らしていたことが、縁起の絵や記録でわかります。天守は、隅櫓と多門櫓で囲まれた中に建てられていたので、下の二階分を御殿風に作る事が出来たのです。

家康は、正清をはじめいろいろな考えや技術を持った人々をうまく使い、アイデアを次々に具体化していったのです。



駿府城模型(寛永12年の天守焼失後の姿を再現。東御門に展示)



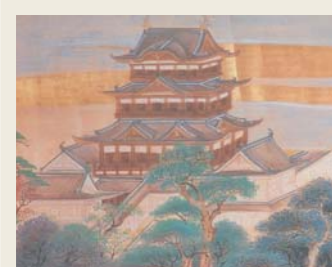
駿府城二ノ丸東御門・巽櫓

## 私の一文字

平井聖さんが選ぶ  
徳川家康公を表現する一文字。

家康は用意周到に計画をたて、計画が漏れないように仕組み、実現していったと思っています。

# 謀



東照社縁起絵巻に描かれた駿府城天守(日光東照宮蔵)